

## (具体的研究の事例：文明史への挑戦—少子高齢化時代の日本、そして世界へ)

社会・地域社会のあり方と少子高齢化・人口減少という事態との関連、生まれてから死ぬまでの人間の居住空間と行動圏、さらには地域社会の変遷を歴史的に問うなかで、コミュニティの再構築の手法を探る一環として、滋賀県内においてフィールドワーク(H19.7.24/25)を実施した。

1. 滋賀県高島市新旭町針江地区において川端(かばた)のある生活を見学した。川端は、家ごとに地下からわきあがる湧水を利用する水場であり、生活用水として野菜や果物を冷やしたり、鍋、釜を洗うのに用いられ、川端に飼われている鯉が野菜くずや米粒を食べて水を浄化し、その水が外の水路に流れ出て、集落内の水路網を流れ、琵琶湖につながる。今回は「針江生水(しょうず)の郷委員会」のメンバーでボランティアガイドを務める福田千代子さんの案内で約2時間川端のある暮らしを見て回った。福田さんたちボランティアガイドの属するこの委員会は、針江地区が有名になり、見学客が訪れ始め、水を大切にする暮らしを見てもらいたいという思いの一方で、川端が家や屋敷内にあるために日々の暮らしが荒らされるのではないかと危機感から結成され、あらかじめ見学を了解した民家を数十人のボランティアガイドが案内するという仕組みを作って対応している。

針江地区約170軒のうち107軒が川端を持っている。この水は集落をめぐる水路で水田に運ばれ農業用水としても使われる。水路から川に流れ出た水は、琵琶湖にむかう。



見学の日は夏の暑い日。子供たちが発泡スチロール製の「いかだ」に乗って川を流れて遊んでいる姿が見られた。川や用水路を守るためにみんなで川を掃除することも年中行事である。湧水、川端、水路、川、水田、農業、祭りと水をめぐる集落の営みが、生活文化となり世代をつなぎ、ここに住む人々のつながりの核となっている。

2. 近江八幡市にある「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」は、伝統的建造物群保存地区にある民家を活かした社会福祉事業団が運営する全国でも例のない公的ミュージアムである。この美術館の特徴は、障害のある人の表現活動の紹介にとどまらず、一般のアーティストの作品と並列してみせることで「人の持つ普遍的な表現の力」を感じ取ってもらおうとすることである。「障害者と健常者」「福祉とアート」「アートと地域社会」など様々なボーダー(境界)を越えていくということに取り組んでいる。見学の日は夏休み中ということで地域の子どもたちを対象に作品作りのイベントが準備されており、企画展示はなく常設展示を鑑賞し、社会福祉事業団の担当職員山之内さんとアート・ディレクターはたよし子さんから解説を伺い、日ごろの活動内容について説明を受けた。



[ボーダレス・アートギャラリーNO-MA カタログより]

NO-MAという名称は、この美術館の所有者「野間」さんの名前からとったものであり、道を挟んだ野間邸の本宅は福祉生協「しみんふくし」の本部として使われ、NO-MAのイベント会場ともなる。

<フィールドワークを終えて>

針江の川端のある集落では昔ながらの「水を核とする」人間関係が、外からの刺激を受けて新しいつながりを作っている。それは、見学者や取材者といった外部とのつながりだけではなく、「生水の郷委員会」に象徴される内部での人間関係の再生、活性化になっている。

高齢社会の今後のあり方を考えるとき、「水」もしくは「水の流れ」は大きな示唆に富むキーワードであると、今回のフィールドワークを通じて改めて感じられた。世界規模での人口増加や温暖化が進んだ場合、水は、限りある資源のなかでも、今後特にその重要性を増すことが予想される。ときには、水の奪い合い、対立や衝突が起こることさえ、懸念される。しかし、水は同時に、世代や人種などを越えて、すべての人間にその絶対的な価値を共有できる数少ない存在である。針江地区における、世代を超えて水と無理なく共存する姿は、あるべき高齢社会の一つのモデルに思われた。さらにとかくダイナミズムの停滞を予想される高齢社会においても、地域にたえず流れを起こし続ける存在があれば、経済的繁栄とは別の豊かさを享受できる社会の構築も可能であることも、強く印象に残った。

NO-MAでは、「沈黙・秘密・孤独」と表現活動・芸術との関係、そして表現の領域を広げる対話やコミュニケーションの役割、作品を通じて成立するコミュニケーションといった指摘が印象に残った。また古い民家の一つの特有な空気が流れる場所として再構築し、世代や障害を越えて自然に行き交い、つながりあう「風通しのよい」空間づくりに向けた、きめ細かい工夫にも多くの示唆を与えられた。またさまざまな状況にある人と人をつなげる「架け橋」となる存在の重要性も、案内をいただいた方々の言葉、姿勢、雰囲気から強く印象付けられたことも併せて記しておきたい。

以上、「水」「流れ」「風通し」「架け橋」などは、高齢社会のあり方を考え、そして具体的に行動するための重要であり、そして得てして経済学的、社会学的観点忘れがちであった大切な「何か」を示しているように、今回のリサーチを通じて感ぜられたことを、ここに記しておきたい。